

英語コーパス学会 Newsletter No. 72

June 1, 2011

■会長:赤野 一郎
■事務局:〒739-8521 東広島市鏡山 1-7-1 広島大学大学院総合科学研究科 井上永幸研究室内
■TEL:082-424-6431 ■振替口座:00940-5-250586(英語コーパス学会)
■URL: <http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/index.html> ■email: inoue@v.email.ne.jp

JAECS
Japan Association for English Corpus Studies

この度の東日本大震災におきまして、被災されました皆様に心よりお見舞い申し上げますとともに、一日も早い復旧・復興をお祈り申し上げます。

第 37 回大会のご案内

英語コーパス学会第 37 回大会は、開催日程が年 1 回 2 日開催となって初めての大会で、10 月 1 日(土)及び 2 日(月)の 2 日間、京都外国語大学(〒615-8558 京都市右京区西院笠目町 6; <http://www.kufs.ac.jp/index.html>)で開催される運びとなりました。会場となる京都外国語大学は、阪急電車「西院駅」から西へ徒歩約 15 分、「JR 京都駅」から市バスで約 30 分のところにあります。事前に経路と時刻をご確認ください。また、宿泊を必要とされる方は、観光シーズンの京都という事情を考慮されて、早めの予約が肝要かと思われます。

詳細は、8 月下旬に送付予定の「大会資料」をご覧ください。

第 37 回大会研究発表者募集

上でもお知らせしましたように、2011 年度からは、これまで春と秋の年 2 回開催して参りました研究大会を、より充実したものにすべく、年 1 回 2 日間にわたる開催へと移行します。つきましては、発表を希望される方は、下記の要領に従って email で事務局宛に奮ってご応募下さい。

【分野】本学会にふさわしい、コーパス利用・コンピュータ利用を中心に据えた英語研究。

【応募資格】本学会員であること。

【発表方法】発表 20 分、質疑 10 分。

【応募方法】冒頭に題名のみを記し、800-1200 字

(参考文献は別)にまとめ、メール添付ファイルで送付。メール本文に氏名(ふりがな)、所属・職名、住所、電話番号、メールアドレス明記。

※審査の際、応募者が特定されないよう、事務局が応募書類を加工させていただくことがあります。

【応募締め切り】2011 年 6 月 30 日(水)必着

※延長されました。

【採否決定】2011 年 7 月下旬(予定)

【問合せ】〒739-8521 東広島市鏡山 1-7-1

広島大学大学院総合科学研究科

井上永幸研究室内

英語コーパス学会事務局

email: inoue@v.email.ne.jp

会誌『英語コーパス研究』第 19 号論文投稿募集について

本ニューズレターとともに、『英語コーパス研究』第 18 号が同封されています。第 18 号には 3 点の論文、2 点の研究ノート、1 点の書評が採択されました。

続きまして、『英語コーパス研究』第 19 号の原稿を次の要領で募集いたします。会員各位の積極的な投稿をお待ちしております。

【原稿の種類】

1. 英語コーパス利用・コンピュータ利用を中心に据えた「研究論文」、「研究ノート」、「実践報告」
2. 「書評」、「コーパス紹介」、「ソフト紹介」、「海外レポート」、「論文紹介」などの各種情報あるいは紹介原稿

【投稿申込締め切り】2011 年 7 月 30 日(土)

氏名、所属、原稿の種類とタイトルを下記原稿

学会賞選考委員会委員長

深谷輝彦（相山女学園大学）

提出先まで電子メールにてお知らせください。

【原稿提出締め切り】2011年9月30日（金）

提出方法等についての詳細は学会 Web ページ
（<http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/>）を参照して
ください。

【問い合わせ先・原稿提出先】

〒980-8576 仙台市青葉区川内 41
東北大学・大学院国際文化研究科 岡田 毅
TEL: 022-795-7632 FAX: 022-795-7632
Email: t-okada@intcul.tohoku.ac.jp

【原稿の長さ】

1. 研究論文

和文：A4 サイズ 1 ページあたり 35 字×30
行，17 枚以内

英文：A4 サイズ 1 ページあたり 70 ストローク×35 行，17 枚以内（10.5 ポイント使用）

※いずれも Abstract（英文），図表，注，書
誌，付録を含む

2. 研究ノート

1 ページあたりは上記の書式と同様で，12 枚以
内

※いずれも Abstract（英文），図表，注，書
誌，付録を含む

3. その他

研究論文の半分以下

【書式】

第 18 号所収の論文を参考にしてください。詳
細は学会 Web ページ（<http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/>）
でご確認ください。

【採用通知】2011 年 11 月下旬

【刊行予定】2012 年 5 月

なお，投稿申込（7 月末締切）への応募の有無
に関わらず，9 月末の原稿締め切りまでに投稿
頂ければ，会誌への投稿は可能です。

『英語コーパス研究』編集委員会委員長
岡田 毅（東北大学）

英語コーパス学会賞

5 月 15 日に締め切りました今年度の学会賞候
補には 2 件の推薦がありました。

また，残念ながら奨励賞には応募がありません
でした。10 月初旬京都外国語大学で開催され
る第 37 回大会で結果を発表すべく，現在選考委
員会で鋭意審査中です。

東支部活動予定

東支部の新年度の体制は，委員長が投野由紀
夫，運営委員が山崎俊次，新井洋一，塚本聡，
大和田栄（敬称略）の計 5 名で運営して参りま
すのでよろしくお願いたします。特に研究大
会が年に 1 回になったため，東支部独自の催し
を積極的に開催していければと考えておりま
す。

第 1 回の催しとして，以下の要領で東支部主
催課題別シンポジウムを開催します。奮ってご
参加下さい。

テーマ：文を超えたコーパス研究：「定量」的な
分析から「文脈」重視の分析へ

日時：7 月 9 日（土）午後 2 時～5 時

場所：慶應義塾大学 三田キャンパス南校舎 445
教室

パネラー及びテーマ：

大谷直輝（埼玉大学）「依存的な句と節に見られ
る談話機能の違い」，

吉川正人（慶應義塾大学大学院）「幼児発話から
の生産的統語パターンの獲得：文法発達の計
算理論に向けて」，

鈴木大介（京都大学大学院）「英語法副詞の多機
能性について — 一語用論的変数と統計的手法
—」，

伊澤宣仁（慶應義塾大学大学院）「コーパスから
見る発話の溯及的評価」

ディスカッサント：井上逸兵（慶應義塾大学），
大堀壽夫（東京大学）

定員：約 50 名

参加費：無料

詳細は下記のホームページを参照ください：

https://sites.google.com/site/naokiotani1979/corpus_symposium

東支部長

投野由紀夫（東京外国語大学）

新入会員紹介（5 月 25 日現在，S は学生）

高橋 千佳子 東京純心女子大学

理事会の決定事項について

5月14日(土)13時より京都外国語大学で開かれた理事会におきまして、以下の議案が審議されました。

■人事について

まず、監事ですが、2期に渡って務めていただきました梅咲敦子先生(関西学院大学)が退任され、新たに古田八恵先生(四国大学)に引き受けていただくこととなりました。梅咲先生、お疲れ様でした。次に、編集委員ですが、3期の長きにわたって務めていただきました堀正広先生(熊本学園大学)が退任され、新たに瀬良晴子先生(兵庫県立大学)に引き受けていただきました。堀先生、ありがとうございました。学会賞選考委員ですが、2期にわたって選考委員長を務めていただきました投野由紀夫先生(東京外国語大学)が退任され〔2008年は深谷輝彦先生が代行〕、新たに新井洋一先生(中央大学)に加わっていただきました。選考委員長は深谷輝彦先生にお引き受けいただけることとなりました。投野先生お疲れ様でした。東支部委員は、投野由紀夫先生、新井洋一先生、塚本聡先生(日本大学)、大和田栄先生(東京成徳短期大学)、山崎俊次先生(大東文化大学)ら5人全員の継続が決まりました。引き続きよろしく願い申し上げます。

■2010年度決算報告と2011年度予算案について

会計の石川保茂先生(京都外国語短期大学)より、梅咲敦子先生により監査を受けた2010年度決算の報告と2011年度予算の提案があり、審議の結果、承認されました。

■Webによる会員管理について

クレジットカードによる会費納入が可能になるWebシステムの導入が、審査の結果、了承されました。

■各種規程の修正について

「運営委員会」から「理事会」への名称変更に伴い、各種委員会の規程の見直しが行われ、編集委員会規程、学会賞選考委員会規程、大会企画委員会規程、各種会議開催経費に関する規程について、各修正が、審議の結果承認されました。

■言語系学会連合加盟について

資料に基づいて、言語系学会連合〔言語に関

する正しい知識と理解を一般社会に浸透させ、個人や単一学会レベルを超えて学術的な言語研究の重要性を発信していくことを目的とする〕への加盟説明があり、審議の結果、承認されました。

■Susan Hunston 講演会について

11月26日(土)に英語コーパス学会より講演依頼をすることが認められました。今回の講演の橋渡しをしてくださったのは当学会の会員でJACET 関西支部長の野口ジュディー先生(武庫川女子大学教授)です。この場を借りてお礼申し上げます。

今後の大会日程と開催校

第37回大会	2011年10月1日(土), 2日(日) 京都外国語大学
第38回大会	2012年10月 大阪大学
第39回大会	2013年10月 東北大学

事務局から

◇会費納入のお願い

2011年度会費(一般5,000円, 学生3,000円)を、日本郵便にある払込取扱票を使ってお納めいただきますよう、ご協力をお願いいたします〔振替口座:00940-5-250586〕。日本郵便発行の受領証をもって領収書に代えさせていただきますので、ご了承ください。別途領収書が必要な方は、80円切手を同封の上、石川保茂(〒615-8558 京都市右京区西院笠目町6 京都外国語大学)までお申し出ください。払込取扱票の通信欄によるお申し出はご遠慮ください。

過年度会費未納の方は、2010年度分と併せてお納めください。会誌『英語コーパス研究』第18号は2010年度の会費を納入していただいた方にのみ、送付いたします。また、2年続けて会費未納の場合、Newsletterなどの送付を中止させていただきます。

住所、所属などに変更や異動のある方は、必ず払込取扱票の通信欄にお書き添えください。

※会員の皆様には、日頃より会費の当該年度内納入のご協力をいただきまして、お礼申し上げます。会費を滞納されますと、退会時に滞納分をまとめてお支払いいただくといった事態にも

なりかねません。会員の皆様におかれましては、円滑な学会運営のためにご協力いただけましたら幸いです。なお、退会を希望される場合は、少なくとも4月30日までに事務局までお知らせくださいますようお願い申し上げます。

◇メーリングリストについて

英語コーパス学会ではメーリングリストを使って会員の皆様の様々な情報交換に役立てていただいているところですが、最近、宛先不明でエラーが返ってくる例も増えています。会員の皆様方には、メールアドレスに変更が生じた場合、速やかに事務局宛ご連絡いただけますようお願い申し上げます。

◇寄贈刊行物の紹介

足立公也・都築雅子 編 (2010) 『学校文法の語らなかつた英語構文』中京大学文化科学叢書 11. 中京大学文化科学研究所。〔都築雅子氏より〕

石川慎一郎・前田忠彦・山崎誠 編 (2010) 『言語研究のための統計入門』くろしお出版。〔石川慎一郎氏より〕

中央大学人文科学研究所編 (2011) 『文法記述の諸相』中央大学人文科学研究所研究叢書 54. 中央大学出版部。〔新井洋一氏より〕

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

FORUM

◆新刊紹介

金澤俊吾 (高知県立大学)

kanazawa@cc.u-kochi.ac.jp

アリス・ダイグナン著、渡辺秀樹・大森文子・加野まきみ・小塚良孝 訳 (2010) 『コーパスを活用した認知言語学』大修館書店。A5 版、306 頁、2,600 円+税。

ISBN-10: 4469213292

ISBN-13: 978-4-469-21329-4



本書は、John Benjamins より 2005 年に Leeds 大学上級講師である Alice Dignan によって出版された *Metaphor and Cognitive Linguistics* の日本語版である。前書きによると、本書は、大阪大学大学院言語文化研究科の教員と修了生である渡辺秀樹氏、大森文子氏、加野まきみ氏、小塚良孝氏の 4 氏によって、2006 年から 2009 年、3 年かけて翻訳され、2010 年 9 月に出版された。

本書は、現在の認知言語学の研究を進展させるきっかけの 1 つとなっているメタファーを取り上げ、先行研究における知見に関して、コーパスデータを用いて例証するというものである。とりわけ、Lakoff and Johnson (1980) *Metaphors We Live By* (以下 L & J) において提案されている「概念メタファー理論」(Conceptual Metaphor Theory) に関して、その理論から示唆される点について、Bank of English のコーパスデータを中心に、言語メタファーの実際の使用について検証する。その結果、実際の言語使用において、メタファーは、L & J が示唆するほど、根源領域 (source domain) と目標領域 (target domain) が明確ではなく、厳密に 1 対 1 の対応関係になっていない。このことから、著者である Dignan は、言語におけるメタファーは、人間の思考法の影響は受けるとは言えても、思考法には決定づけられていないと結論づける。本書は、序章と 3 部 10 章から構成されている。

序章

第 I 部 メタファー・メトニミーの最新理論モデル

第 1 章 概念メタファー理論と言語

第 2 章 メタファーの定義

第 3 章 メタファーとメトニミー

第 II 部 メタファー研究の最前線

第 4 章 コーパス言語学のメタファー研究

第 5 章 メタファー研究の認知的、心理言語学的方法

第 6 章 メタファー研究と談話分析

第 III 部 コーパスデータの考察

第 7 章 メタファーの文法

第 8 章 根源領域と目標領域の意味関係

第 9 章 メタファーとコロケーション

第 10 章 結語

第 1 章では、概念メタファー理論の基盤を成

す 6 つの中心的教義を概観している。その上で、L & J が引用するメタファーの大半がインフォーマントから引き出された点に問題があることを指摘する。そして、Bank of English に収録されているコーパスデータを観察し、概念メタファー理論から予測されることを再検討する。その結果、言語メタファーは、従来の概念メタファー理論の定義よりもはるかにダイナミックで、かつ、より制約のある方法でメタファー同士が関連づけられることが明らかになる。

第 2 章では、概念メタファー理論における言語メタファーの定義を紹介する。言語メタファーは、概念領域間の写像関係を具現化するものであり、多様性がみられる。特に、メタファーが関わる言語表現を慣用化する際、段階性がみられることに注目し、Lakoff (1987) による 4 分類と、Goatly (1997) における 5 分類をそれぞれ挙げている。著者は、これらを部分的に発展させて、メタファーに動機づけられた言語表現として 4 つのタイプ (①革新的メタファー (innovative metaphor), ②慣用化したメタファー (conventional metaphor), ③死んだメタファー (dead metaphor), ④歴史的メタファー (historical metaphor)) を提案する。また、従来のメタファー研究の定義により、研究対象から除外されてきた 2 つの事例である、①dog の写像関係に代表される事例と、②意味的に「空」(empty) である事例 (例: 英語における前置詞, have, do, give に代表される非語彙化動詞) に関しても、言語メタファーが関わる現象として扱うべきであると主張する。

第 3 章では、メタファーとメトニミーとの間には重複する部分があり、相互に作用し合うことで、言語表現が生成されることを論じている。その際、これら 2 つの概念は、別個の概念ではなく、5 つのカテゴリ (①メトニミー表現 (metonymy), ②メタファー内のメトニミー (metonymy within metaphor), ③メトニミー由来のメタファー (metaphor within metonymy), ④メトニミーに基づくメタファー (metonymy based metaphor), ⑤メタファー (metaphor)) から成る、連続的な変異体であると提案する。

第 4 章では、コーパス言語学を概観し、メタファー研究への応用可能性について論じてい

る。言語を観察する際、直観よりもコーパスを用いることが有効であることを強調する。コーパスを用いると、コンテキストにかかわる情報が得られ、字義通りの意味とメタファーとしての意味の存在と頻度、共起関係、統語的振る舞いをそれぞれ調べられる点に有効性がみられる。その上で、コーパス言語学がこれまで取り組んできたメタファー研究と、異言語間にみられるメタファー研究についてそれぞれ紹介している。

第 5 章では、認知言語学におけるメタファー研究と、心理言語学におけるメタファー研究について概観している。これら 2 つのアプローチは、インフォーマントによる直観的言語データと、導出された言語データにそれぞれ基づいている。それが原因で、次に挙げる 2 つの問題が残されている。ひとつは、字義か比喩的意味かを判断できないという曖昧性に関する問題、もう一つは、人が頭の中で真っ先に思いつく語の意味と、実際の言語使用における語の頻度には乖離が見られるという問題である (e.g. shoulder, back, soar)。それを解決するためには、コンテキストとコーパスデータを使用することが重要であり、これらの観察から得られる知見が、認知言語学、心理言語学にそれぞれ貢献できることを主張する。

第 6 章では、談話分析に基づくメタファー研究を紹介している。談話分析は、様々なジャンルの言語資料を用いる点において、概念メタファー理論の発展に貢献している。しかしながら、研究対象とするテキストのジャンルの範囲が狭く、コーパスの規模が小さいので、極めて限られた数の言語データに基づいて一般化を図ってしまうという問題が残されている。それに対し、コーパスを用いると、データの規模に関する問題が解消され、談話分析にはみられない次の 3 点についてメタファー研究に貢献できる。第 1 に、メタファーの暗示の意味を確認できるという点、第 2 に Pancake (1993) による〈機械は生ものである〉(MACHINES ARE ANIMATE) というメタファーが、ジャンルを問わず広範にみられることを明示できる点である。第 3 に、Voss ほか (1992) による, pluck . . . air, crystal ball というそれぞれの表現に関して、頻

度を確認することで、常に〈魔法使い〉(MAGICIAN) というメタファーを写像する表現ではないことを示すことができる。コーパスを用いたメタファー研究は、談話分析に基づく研究で不足している部分を補完し、かつ、概念メタファー理論の進展にも貢献している。

第 7 章では、言語メタファーの文法的側面について議論している。字義用法と、比喩的用法との間には、文法上、多くの違いがみられる。この違いに関してコンコーダンスを用いて検証している。具体例として、第 2 章で挙げた dog の例や、字義用法では動詞であるのに対して比喩的用法では形容詞に転換するパターン (e.g. moving, stirring)、字義用法では能動形、受動形、どちらの形でも生起するのに対して、比喩的用法では受動形のみをとるパターン (e.g. moved, rocked) が挙げられている。特に、rock がメタファーとして解釈される際、単数形の場合には肯定的意味を表す傾向が強いのに対し、複数形 rocks の場合には、否定的意味を表す傾向が強いこと、rock と共起する修飾語によって肯定的意味、否定的意味に区別される点が興味深い。

第 8 章では、言語メタファーを、メタファーが写像にかかわるグループと、メトニミーが写像にかかわるグループに分類した上で、それぞれの意味的特徴を検討している。メタファーが写像に関わるグループでは、根源領域と目標領域との間で、類義語の関係や反義語などの意味的特徴の対応関係が一貫してみられる。一方、メトニミーに基づくメタファー、メトニミー由来のメタファーには、その一貫性がみられないことを指摘している。著者は、メトニミーに関わる後者の具体例として light, dark をそれぞれ挙げて、コーパスを用いて L & J が指摘する〈思考は植物である〉(IDEAS ARE PLANTS) メタファーと、Kövecses (1991) による〈知ることは見ることである〉(KNOWING IS SEEING) メタファーに関してそれぞれ詳細に分析している。

第 9 章では、言語メタファーにおいて、根源領域から目標領域へ写像される際、どの程度まで共起関係が保持されるのかを検証している。price, rise それぞれの語のコロケーションのパターンについてコンコーダンスを用いて検証する。その結果、これらの語と共起する語には 3 通り

の振る舞いがみられる。1 つ目は、price, rise とそれぞれ共起する語が、字義通りの意味と関連づけられる場合である (例: price の場合、share, cut, half, sale, purchase, retail がそれぞれ共起語に該当し、これらの語は字義通りに解釈される)。2 つ目は、共起語が比喩的意味と関連づけられる場合である (e.g. heavy price, price to pay)。3 つ目は、字義通りの意味と比喩的意味としての意味の両方に共起する場合である (e.g. at any price)。その上で、言語メタファーにおける語と語の共起関係をみると、言語使用には 2 つの傾向がみられることが示唆される。ひとつは、創造性を目指した語彙関係の知的利用がなされているということである。もう一つは、考えを一括してまとめて固定した連鎖にしようとする傾向である。

第 10 章では、結語として本書のまとめを述べた上で、今後の研究に関する展望を述べている。著者は、コーパスのジャンル間の比較、コーパスの通時的な比較の可能性を挙げている。また、通時的な比較により、概念メタファー理論にみられる、語源の力を前提とするメタファーの存在も説明できることを指摘している。

以上、本書の内容を簡単にみてきた。本書での分析は、認知言語学で提案されている理論的考察について、コーパスデータを用いて経験的事実を用いて例証し、さらに経験的事実から、理論的一般化に貢献している。これに類する研究成果は、ここ数年、日本における認知言語学の分野において、研究発表、書籍によって発表されている。本書での分析から得られる知見ならびに研究手法は、メタファー研究にとどまらず、今後、様々な言語現象、諸構文の意味的特徴にかかわる分析に広く応用できる可能性を持っている。また同時に、言語を研究する者にとって、本書における研究姿勢は、今後ますます必要とされる。

むすびにあたり、日本語版である本書の特筆すべき点を挙げたい。それは、原著の内容に関して補足する情報を豊富に盛り込んでいる点である。さらに、原著で引用されている例文や資料については出典の資料にあたり、原著の内容についても、著者に照会して修正すべきところ

は修正が施されている。

この読者に対する心遣いからも、4名の訳者の原著に対する意気込みと強い想いを感じ取ることができる。それが、また、読者に読み応えの感を与えてくれる。言語学をこれから学ぼうとする者にとって、また、これまで学んできた者にとっても、是非とも1度手に取り読んで頂きたい1冊である。

参考文献（紹介順）

- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press.
Lakoff, George (1987) *Women, Fire and Dangerous Things:*

What Categories Reveal about the Mind. Chicago: University of Chicago Press.

Goatly, Andrew (1997) *The Language of Metaphors*. London: Routledge.

Pancake, Ann S. (1993) "Taken by Storm: The Explanation of Metaphor in the Persian Gulf War," *Metaphor and Symbolic Activity* 8, 281–295.

Voss, James F., Joel Kennet, Jennifer Wiley, and Tonya Y. E. Schooler (1992) "Experts at Debate: The Use of Metaphor in the U.S. Senate Debate on the Gulf Crisis," *Metaphor and Symbolic Activity* 7, 197–214.

Kövecses, Zoltán (1991) *Metaphor: A Practical Introduction*. Oxford: Oxford University Press.